



徳嶺勝信

ベトナムは去った4月30日に43年目の終戦記念日を迎えた。ベトナムでは数少ない祝日であり、各地で終戦記念イベントが行われた。ホーチミン市でも大々的なイベントが開かれ、夜には盛大な花火が打ち上げられた。翌日のメーデー祝日もあり市民は夜遅くまで街に繰り出していた。

当方は仕事柄、日本から進出する企業を案内する機会が多い。その中でも初めてベトナムを訪れる同世代(50歳)以上は、ベトナムと言えばベトナム戦争をイメージする人が多い。しかし、いざベトナムの経済発展を目の当たりにすると、多くの方が驚く。それほど近年は急速に発展し、「本当に43年前にこの国で戦争があったのか」と疑いたくなるほど、戦争のイメージは感じられない。少しだけベトナム戦争を振り返ると、1975年4月30日、14年余りの長い戦乱の末、南ベトナム(旧サイゴン、現在のホーチミン市)が陥落してベトナム戦争が終息した。

終戦後 急速に経済発展

ベトナム

60年12月に開戦と言われているが、実際には正式な開戦がどの戦闘から始まったのか定かな記録はない。それまで断続的に行われてきた南北ベトナムの内戦が拡大。これに米ソの冷戦が加わり、代理戦争として泥沼の戦いが繰り広げられた。

沖縄からもベトナムに向けて多くの米兵が出兵し、空爆のために多くの戦闘機、特にB52などの大型の爆撃機が沖縄から飛び立った歴史がある。ベトナム戦争景気などと言われ、経済が潤った時期もあり、よそ事とは思えない沖縄の人も多いのではないか。

ベトナムも日本同様に、中国を含む近隣諸国と領土問題を抱えている。小国でありながら大国としてたたかに渡り合い、アジア、ヨーロッパ、米ソを含め世界中から人々が集まる国になっている。近い将来、戦後、急速な発展を遂げた歴史的な国として、世界史に刻まれる日は近いのではないかと感じている。

そんなベトナムは地理的要素、人的要素も含め、特に南のホーチミンは沖縄と似ているところも多々ある。ベトナムへの進出を考える沖縄の企業やビジネスパーソンにとってこのチャンスはどう生かすか、真剣に考える時期が来ている。(ベトナムJES代表)

次回は韓国の大嶺浩次・世一旅行社販売課次長です。